転生したらいっそ清々しいほどのチートになった

フラグ建築したい男

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目覚めたら目の前には絶望がありました。・・・てちょい待てや。百歩譲って転生かなんかしたのは認めてやろう。けどさ。俺の今世ハード過ぎね？しかも成長していったら分かったことが。・・・女だー。更に無表情であまり喋れないぞぉ？

これは、転生したら最凶の竜に育てられた、チートな彼女（彼？）の物語である。

処女作でございます。これからもドンドンとお目汚しをしてしまうかも知れませんが、何卒、優しくお願いします。

あとｖｉｔａで投稿してるので書きづらさと何らかのアクシデントで「ここまで書い

てたのに！」となってただでさえカタツムリ不定期更新なのが更にムリムリカタツムリになるかもですが、そこは皆様の寛大なお心で許してください。

タグは気づいたり、感想などでこれつけたらいいんじゃない？というのがあったら教えてください。感想を見次第、直ぐにつけるので

目次

プロローグ
出会いの挨拶が絶望とはこれ如何に　1
転生したら女とはこれ如何に　6
妖精と闇の翼
奴隷になるとはこれ如何に　12
救助作戦とはこれ如何に　18
過去の清算とはこれ如何に　24
ピンチなのにゲームとはこれ如何に　29
死体扱いとはこれ如何に　35
おまけ話：ギルドに所属したのである

プロローグ
出会いの挨拶が絶望とはこれ如何に

その竜は同じ竜を根絶やしにしたかった。竜が同種であるはずの竜を根絶やしにする理由など分からないが、竜は竜を根絶やしにすることを目的としていた。来る日も来る日も、竜を殺し、殺しては殺し・・・。

そんなある日だった。竜は偶然立ち寄った草むらで、人間の赤子を見かけた。竜は人間をゴミとしか認識してなかったのだが、その赤子に興味を持ってしまった。不思議だった。自分という存在を見ても泣かなかったのだ。

普通なら、大きいゴミは自分を見て、絶望して、泣きながら笑ったりするのにだ。

そんな赤子に興味を持った竜はその赤子を育てることにしたのだ。

(もう残りの竜も少ない。少し休んでも大丈夫か)

そう思い、竜は暫くその草むらに留まることにしたのだった。

～～～

目覚めたら目の前に漫画の最凶の一角が。

こんなとき、貴方ならどうしますか？俺はどうもできません。
だって考えてみろよ。とても気持ちのいい目覚め（但し寝起きドッキリという企画事態がドッキリするような目覚め）。それに加え、こっちを見る最凶と、自分の体が某名探偵の如く体が縮んでいるという状態。どうやったら冷静に現実を捉えれるんですかね。教えてくださいよ。
「・・・フム、メザメタカ」
キャアアアアアアアアシャベッタアアアアアアア
目覚めたら目の前に『ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ』のアクノロギアが居て、それでも驚いてるのに、なぜそこで喋るという追い討ちをかけてくるんですかねぇ！俺の脳がオーバーフローするのですけど!?
「ゴミナドヲキニシタコト、ココスウヒャクネンナカッタガ・・・アカゴヲソダテテミルノモオモシロイカモシレンシナ」
意外にもノロギアがお喋りかもしれない、て暢気に考えてる自分がいるんだがそれはそれとして俺って今、赤ちゃんだった!!
そら驚くわ！何せアクノロギアと言ったらこの世界での絶望の象徴だ。子供はおろか、大人でさえコイツを見たら「あ、死んだ」てなるヤツだぜ（昔の友人情報）？そんなヤツを前にしてるのに、この赤ちゃんはボーッとしてるとか常軌を逸しているだろ！

あんさんが興味を持っても仕方ないわ・・・。
ていうか話しかけてくれてるのに笑ったりしなくても大丈夫だろうか。殺されたりしないだろうな。・・・一応笑っとこ。そう思って俺は笑おうと・・・

あれ？動かん、動かんぞ？
これはアレですか。最近転生物の小説とかでよくあった無表情転生とかじゃあるまいな。え、マジで？俺の表情筋終わった？まだ赤ちゃんだから～とかではなく？御陀仏しちゃった？
・・・ヤベぇわ仮にこの状態から生き残れたとしてもコミュニケーション能力皆無でマジ詰んだわ。
そんなこと思ってたらアクノロギアの独り言は終わったみたいだ。何か此方に来てる。・・・何で？
・・・アレ？何で俺の目の前まで来てるんですかね。そして何で俺をバッチリ見下ろす感じ？ちょい待って、何で顔を近づけてきてるの？怖いよ？めっさ怖いよ？けど顔面動かないよ？どうすればいいんだい？
「フム・・・ココマデシテモコワガランカ。・・・キニイッタ」

え、ちょい待てや。何や気に入ったて。アレか、餌として気に入った、てか?俺を食べるんですか、ノロギアさん。

そしてこんな時でも全く動かない顔面。もう一種の呪いにでもかかったのかね。これはあれだ。某不幸な少年の言葉を借りるならば。

・・・不幸だ。

～～～

月日が流れるのは早いもので、気づけばもう早8年も過ぎていた。

その間、俺はずっとアクノロギアに育てられていた。・・・これいつかさ。「飽きた」つって捨てられたりしないかな。・・・しないよね?無いと信じたい。

んで、俺は今勉強中です。何のかって?・・・この人(竜?)実は教えるのめっちゃ下手でサー。正直覚えれないと言うカー。・・・ハイ、滅竜魔法です。ハイ。スゴいよね。５才位から修行始めたんだぜ?この竜の神経疑っちゃうわ。

それよか俺思うんだよ。友人情報だとアクノロギアって元は人間で、竜を殺すのに滅竜魔法を使いすぎたから竜になったらしいのよ。

てことはよ?この人は滅竜魔法を使い慣れてるということであってだな。そんなヤ

ツからその滅竜魔法を習うということはだ。・・・スゴく・・・強いです・・・てなるんじゃね!?と、考えたわけだ。

更に確か第二世代の滅竜魔導士意外って確かさ。その魔法を教えてもらったドラゴンの滅竜魔導士になってるのよね。で俺は誰に教えてもらってますか?アクノロギアです。最凶です。

さあここで私の将来的な実力を考えてみましょう!おかしいな、ゼレフ教の実験動物とかにされそうだ。・・・仮に力を持ってしまった場合さ。力てどうやって隠せるのん?いわゆる魔力的なヤツ。ま、今から考えても仕方ないか。

取り敢えず今は・・・

「おい、そうじゃないと言ってるだろう。もっとこう・・・バーンッ、といった感じでだな」

「・・・」

・・・誰かこの人（最凶）をどうにかして。切実に。

転生したら女とはこれ如何に

やっほう。何か知らんけど目覚めたら「ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ」の最凶が目の前にいて困惑してた俺ですよー。

あのとき、アクノロギアに育てられるようになってからずっと考えてたことがあってさ。あることが分かったんだよ。そのあることってのが、まずアクノロギアが人間に変身出来たこと。そして、これが長い夢とかではなく完全な現実だということだ。さらにだな?その、とっても重要とも言える性別がですな?えー、まあ・・・前世と違ったのですよ。

・・・オイなんだその目は。その「転生も疑わしいのにそのうえ性転換だって?アホらし」みたいな目を今すぐ止めろ。

だって考えてみろよ。いくら夢っていったって六年とかも続くわけないだろう?冷静に考えてみたら誰でも分かるよな。で、俺がその事実を知ってどう思ったかというとだ。転生したことがめっちゃ嬉しくて魔法で周囲の森を壊してしまったのサ!

・・・翌日から魔法の修行がキツくなったけどな。

ん?性転換?俺の「転生系小説の三大嫌な要素の一つ」に入るわ。転生したら前の性

別とは違いましたー、とか何の拷問だよ。俺はホモではないがそんな堂々と女の子の裸を見れるほどバカでもないからな。ていうか恥ずかしさで水浴びのときは毎度毎度、心の中で悶えてるんだぜ。顔に出なくて良かったわ。こういった点では表情が無表情で固定なのは感謝してもいいんだけどな・・・。

さて、話を変えるか。

寝相についてちょっと話したいんだよ。何でイキナリ寝相？て思ったろう。大丈夫、それが普通の反応だ。けどな？これには理由があってだな。

それはいつもの様な朝だったんだよ。いつものように目覚めた俺はいつものように水浴び行って、さあ今日も修行頑張ろー的な感じで戻ってきたわけだよ。そしたらだ。アクノロギアが何故か怒ってきてよ。よく話を聞いてみると、昨夜俺は寝ぼけてアクノロギアの鼻にくっついてしまったみたいで、それで昨日は俺を剥がすのに四苦八苦して寝れなかったんだと。

それを聞いて「あ、ヤベ。やっちゃアカンことやん。めっちゃ怒っとるやん」となってよ。普段喋らないのにこの時だけは声だして謝ったんだよ。そしたらだ。何故かはしらんけどアクノロギアは少し固まってから「まあ、いい」と言ってくれたんだよ。

良かったわ～。許してくれたわ～。と、俺はその時は安心したがもしかしたら今後もこういったきとがあるかもしれないと思ってこの寝相を治そうと思ったんだよ。が。

ここである問題が発生した。
・・・寝相ってどう治せばいいんだろうね?
よって寝相は治せないので気を付ける事にした。寝てるのに気を付けるもクソもあるか、と思ったかもしれんがそこはどうにかするしかない!
〜〜
育てることにした子供は無口で無表情であった。恐らくこの子供は、ゴミどもがこの子供が赤子だというのに何も泣かず、表情も一切変えないから気味悪がって捨てたのだろう。と推測した。
滅竜魔法を教え始めた。そしたらこの子供は面白いように知識を吸収しはじめた。そして教えはじめて一日で三つもの魔法を使えるようになったのだ。この子供は・・・面白い。
ある日、子供がいきなり周囲の森を壊し始めた。嬉々とした顔で壊し始めたから、明日から力の制御のためにも修行をキツくせねばと思った。
今日、我は、寝苦しくなったことを子供に伝えた。そしたら、とても悲しそうな顔で「・・・ごめんなさい」と言ってきた。何だこの子供は。この我が愛い奴と思ってしまったではないか。・・・まあ、この子供が特別なのだ。きっと。

いつまでも子供と呼ぶのはさすがに可哀想と思ったので名前をつけることにした。何かいい名前は無いものか。

名前を決めた。アリア・ロギアとした。人間だったころの名前なんぞ覚えてないが、たぶんこういう感じだったと思う。名付けかたもこれでいいはずだ。とりあえず明日にでも伝えるとしよう。

〜〜

アクノロギアが名前をくれた。どういう風の吹き回しかと思ったけど。普段ぶっきらぼうなアクノロギア少し照れながら渡してきたのを見て「偽物じゃ・・・」と思ったけども。実は裏があるんじゃとか思ったけども！素直に嬉しかったので「ありがと」と伝えた。そしたら何故かアクノロギアが満足そうな顔をしていた。

名前はアリア・ロギアと言うらしい。案外いい名前と思った。うむ。

そういえばさ。ここ最近アクノロギアがさ。鱗を一、二枚程剥がしてさ。粉々にして肉と一緒でいいから食え、と申してくるのよ。もう一種のイジメかと思ったけど何かここ最近は食べるたびに安心するというかなんというかそんな感じがするんだよね。なんでだろ。

あと、アクノロギアが「そろそろ我は旅に出る」と言ってきたんでお別れかなと思っ

たのよ。そしたらさ。ベストタイミングで砂ぼこり舞ってさ。涙が出てしまったのよな。それで目を擦っているとアクノロギアは「どうせ、またいつか会える」と言って俺の頭を撫でてきたんだ。

あのアクノロギアがだぜ?考えられるか?

まあ、それはいいとしてちょっとアクノロギアさん。その布貸してくれません?以外にも砂ぼこりが痛くて涙が止まんなくてさ。ちょっとその布をお貸しくださいな。

そう思ってアクノロギアに引っ付いて涙を擦り付けてたら、何とアクノロギアが俺のことを抱き締めたんだ!

・・・中々素晴らしいお力で。

ぎゃぁぁぁぁぁぁ!俺の背骨がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!

背骨が折れるような音を聞きつつ、俺の意識は途絶えた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜

アリアにそろそろ旅に出ると伝えたら泣かれた。思わず撫でてしまった。仕様が無かろう。撫でてしまうほどアリアが愛い奴ということだ。

そしたらアリアが我に抱きついてきた。それも精一杯に。思わず抱き返した。愛い奴だ。

しばらく抱き締めてたらいつの間にかアリアは寝てしまっていた。・・・今がチャンスか。

そう思い、我はこの地にアリアを残して旅に出た。置いていくのは我も悲しいがそこは耐えてもらおう。

そうして我はアリアと別れた。

妖精と闇の翼
奴隷になるとはこれ如何に

「オラさっさと歩け、このウスノロ」
「・・・」
「チッ、何でこんなに役立たずなんだ、お前はよ！」
ーヒュッ　バシィィィン!!
「・・・ッ！」
「ひゃはははは！やっと表情見せやがったな！このガキ！」
ヤッホー。めっちゃ罵倒されてるアリアちゃん（元男）だよー☆
・・・やっべ。自分で言ってて鳥肌たったわ。
茶番は置いといて今俺がいるのはどこか分かるか？俺、順調にフラグ回収しちゃったんだわ。何とここは楽園の塔でーす！・・・最初に言っちゃった事が起こっちゃったのよね。ゼレフ教の連中に捕まっちゃったのだよ。
いやぁ、大変だったよ。起きたらアクノロギア居ないしさ。いないもんだからそこで自給自足の生活してたんだよ。原作なんぞに関わってられるか！てな。そうやって生

活してたら、ある日俺の事を見られちゃったとき以来、案外協力しながら生きてきていた村がこのゼレフ教の集団に襲われていてさ。助けに行ったら赤い髪の女の子を盾にして、チキン戦法されてさ。

結果、捕まってしまって今ここにいるんだけどさ。いやぁ、驚きましたね。その時、盾にされてた女の子がエルザだって言うんだから。え？お前原作読んでたんじゃないのかって？読んでたよ。・・・友人に勧められてた、アクノロギアのとこだけな。それ以外は全部友人が勝手に話してたし、聞いてた時もあったけど、全部覚えてる訳じゃないしね。そりゃ、分かんなくて当たり前だよねー、と

さて、俺が何故罵られているのかというとだな。簡潔に述べると、「コイツ鞭で叩いても表情変わんないなー。じゃ変わるまで叩くか」と思ったのではないのかな。今俺を叩いてる人がことあるごとに叩いてきたのよ。

しかも叩いても表情変わらないのがお仲間さんに伝わったのか、いろんな人に会うたびに「建材の運び方がなってねぇ」だの、「歩き方が気に入らねぇ」だの、もはや最終的には気に入らないで叩き始めてきてだな。それでも表情変えないのが上の方の耳に入ったのか、「コイツの表情を思い切り変えさせたら昇格」というトチ狂った命令を出してきてくれましてな。毎分？位の頻度で叩かれているのさ。

・・・普通に長かったな。すまない。本当にすまない。（誰に言ってるんだと思って悲

しくなってきた）

で、冒頭に戻るけど俺が表情を変えた？理由分かるかな？実はだな。アクノロギアさんに鍛えられていたのが良かったのか、鞭自体は痛くないのよ。

では俺が表情を変えたのは何故か。答えはウザったいからです。

そろそろやり返してもいいかなー、と思い始めちゃったんだよね、俺。良いよね。やっちゃっても良いよね？だってこちちとらさ。毎日毎日罵られて鞭で叩かれて（以下ループ）・・・ になってるんだぜ？それをもう、三週間は耐えているんだよ。自分でもよく耐えてるな～、と感じるんだよ。

前世のバイト先は中々ブラックだったけどここよりかは罵倒も少なかったんだ。が、あまりにも先輩からのイジメが酷くて、店長はそれを見て見ぬふりしてくれたからさ。一週間で辞めたんだよ。・・・一応言っとくがその後良いバイト先見つけてそこでずっと働いてたからな？そしてそんなバイトを一週間で辞めた俺がここまで地味な嫌がらせに三週間も耐えてきたんだぞ？

まあそんな訳でだ。やり返したいと思いまする。

「オラもっと表情変えてみせ・・・ろ・・・？」

何でだろうな。飛んできた鞭の先を掴んだらめっちゃ驚かれた。目の前の奴なんて固まってるもん。

あれか。「さっきまでなすがままにしてた子供が何でいきなり鞭の先を素手で掴めてるんだ」てやつか？けどそんな驚くことか？これたぶん先っぽは鉄じゃなくて石だろ？メッチャ遅いしさ。

・・・女の子だから傷つけないように？となると予想できるのはそういった事で需要がある、もしくはこれからあるから？・・・逃げよう。絶対逃げよう。今すぐ逃げよう。よしそうと決まればさっそく実行だな！

まずはコイツを殴って壁にめり込ませて。

――――ドゴォ!!

「ゲハァ!?」

何か、人体から出てはいけない音がしたような気が・・・。い、いや、気のせいだな。うん、そうに決まっている。

気を取り直して、今度は壁にめりこませた・・・男・・・で良いんだよな？男（というか壁）に魔法をぶっぱなす！

「・・・魔竜の・・・咆哮。」

――――ドッ・・・ガァァァン！

「なぁっ!?滅竜魔法だと!?まさか、アイツなんかが滅竜魔導士だと!?そんなのあり得るはずが・・・」

「そんなことを言ってる場合か!?同士が攻撃されているのだぞ!?」
「いや、元々コイツらの魔力量などは測ったではないか!?それによるとコイツの魔力量は底辺もいいところだった筈だったんぞ!?」
あー、そういえばそんなことされたような気が・・・。
けど意味無いのよね。だってアクノロギアさんは魔力の隠蔽方法まで教えてきたからね!・・・まさか魔導具さえ欺くとは思わなかったが。
にしてもゼレフ教の奴らって人身売買もやってたんだな。コレはもう壊滅させるべきかねぇ?けどなぁ、それで本来の歴史から大幅にずれちゃったらメンドイしなぁ。・・・俺だけ逃げる?いやいや、それは酷すぎね?他の方々がせっせと働いて（強制）くれてるときに俺は一人外でのんびり暮らすと?ソイツはやりたくないわ～・・・。
いっそ俺がジェ・・・ジェ・・・何だっけ、ジェリーだかジェルーだかそんな名前だった気がする。原作のソイツみたいに一揆起こすかね。
ふむぅ・・・。どーしようかね。下手に動かれんし・・・。
・・・よっしゃ決めたわ。俺は一揆起こしてここの奴隷さんを全員救出する!ただしジェリーくん。君は歴史を最低限変えないためにも捕まってもらう!
そうと決まれば全速前進ＤＡ☆

・・・で、俺が放った咆哮で空いたこの大穴。どうしようか。

救助作戦とはこれ如何に

初めて見たのは村の中。商人さんの前で、買ったんだろう果物を頬張っていたところ。

その時の私は「村の中で見たことない子がいる」としか思っていなかった。

「きっと親に付いて来て「ちょっとだけど遊んできてもいいよ」と言われたのかな」ていうふうに考えていた。

けど実際は、その子は一人暮らしで、更にまだ私と変わらないくらい小さいのに自分で狩りに行っていて。

それを知ってからは「スゴい」とか「私には無理だ」とか、そんなことしか思い浮かばなくなっていった。

そんな気持ちがいつしか憧れになっていて、気付けば「私は将来はあの子より強くなって、そしてあの子と一緒の魔導士ギルドに入る」と思っていたのだけれど・・・。

ある日私達の村を襲ってきた『ゼレフ教（？）』の人たちによって、その夢は叶わなくなったんだ。

その『ゼレフ教（？）』の人たちが私達を連れてやって来たのは、世界で一番有名な『黒

魔導士　ゼレフ』を復活させるための建造物。
私達はそこで、その建物を建てるために働かされていた。そのなかでもあの子は顔色一つ変えないまま、今まで過ごしてたの。
けど今日、アリアが――――アリアっていう名前なのはこの前本人から聞いた――――表情を変えたの。教団の鞭で叩かれて。
私は「おかしい」と思ったの。だって、その子が他の人の仕事さえやっていたのに叩くんだもの。
アリアだけで、他の人の数倍の量の仕事をこなしているのに「仕事が遅い」とか「もっと速く歩け」とか、挙げ句の果てには「気に入らない」ていう理由で叩き始めた。
けど、アリアの背中には傷一つも無く、傷ついていたのはアリアの服くらいだった。
これにはジェラール――――ここに連れて来られて仲良くなった友達っていうか、仲間っていうか・・・あ、ジェラールの方が私達より長くここに居るんだ。いつかここから出るのを楽しみにしている。私も早く出たいなぁ。ジェラールとアリアと私で、フィオーレ一の魔導士チームになるんだ。
ただ、これはあくまでも夢で、叶えるのは無理に等しいってことは分かってる。だから毎日そんな夢のことを思ってこの日常に耐えてきた。
けど、今日はもう、そうやって耐えるのは無理だ。

脱走しようとしたことがバレて、私は犯人として連れていかれた。ジェラールが私を助けようとしてくれたおかげで、私はもう返されたけど、ジェラールが捕まっちゃったんだ。

・・・もう、限界だ。

アリアのこともある。ジェラールのこともある。・・・みんなのことがある。

今日で、こんな日々を抜け出してやる。

「・・・自由を掴むには、もう、戦うしかない」

みんなに、ゆっくりと語りかける。

「自由にために、立ち上がれぇぇぇっ!!」

ジェラールを助けて、そして逃げるんだ。

～～～

壁の後片付けどうしよっかな～。とか思ってたらエルザ達が反乱を起こしたでござる。・・・え、ちょ今ですか?タイミング良すぎではありませんこと?しかも都合よくジェリーくんに擦り付けれそうだし。よし、後は任せたよジェリーくんやい。ってあ

れ、ジェリーくんがいないぞ。どういうこった。

・・・んー。

俺の知らないところだな！なんかここの話についてアイツがバカみたいに話してたけど、俺覚えてないし！にしても随分と都合よく『覚えてる』『覚えてない』があるもんだな。まあいいか。とりあえず俺はこんなとこさっさとオサラバして「魔法兵だぁぁ！」

・・・は、何事じゃ？

「に、逃げろ！いくら武器を持ってるって言っても、俺らが敵う相手じゃねぇっ!!」

ほう。魔法兵とな？字面から想像するに、魔法を使う敵とな？・・・俺が一掃するかねぇ。けど俺がいる時点で中々バタフリー効果※がありそうなのにその上で助けるとか、なんていうかもう、ねえ？

「ジェラールを助けてぇぇぇぇっ!!」

ハイハーイ了解でーす。女の子が頼んできたら断れないよね。そういうことで。

ジェラールくんを助けよう大作戦！

内容はジェラールくんを見つける。そして助ける。以上！

行ってきまーす！

あ、お前ら邪魔だ。「・・・魔竜の翼撃」「ぐあああああああ!!?」
行き掛けの駄賃ってことで。魔法兵は退場願いまーす。

☆

走ること数分。道中の教団のヤツはぶっ倒して来ました。そして見つけたおそらくジェラールがいるだろう部屋。何てったって今も部屋からジェラールくんとやらの声が聞こえるからね!
というわけで・・・
(おはようございまーす!)
「・・・」
(おやおやどうしたジェラールくん。随分静かですねぇ)
「・・・ん?ああ、アリアか。すまない、ちょっと考え事してたんだ」
「・・・いい」
(別にいんだぜ?とりあえず今はさっさと抜け出すぞー)
「着いてこいって?」
「・・・(コクリ)」

さて、ジェラールくんの鎖はなぜか外れてたし、さっさと連れていくか。・・・にしてもなんか忘れてる気がする。具体的にはこの楽園の塔について。なんかラスボスについて忘れてる気がする。

めっちゃ重要なはずだ。なっか、もうちょっとで思い出せｓ「悪いな、アリア」

「眠っていてくれ」

何か・・・眠くなって・・・・・・・

「・・・ククク・・・アハハハハハハハハ!!!」

過去の清算とはこれ如何に

「・・・塔の名は『楽園の塔』。別名『Rシステム』。」
エルザは語りだした。かつて、どういった目的で、どういった集団がこの塔を建築したのか。
過去、自分はどういった経緯でこの塔におり、どういった経緯で『妖精の尻尾』まで辿り着いたのか。
自分を攫ったジェラールはかつての仲間だが、どうやらゼレフに憑かれている、もしくは狂信しているようだということも、自分の魔導の目覚めのことも、自分を庇ってくれたロブ爺のことも、全てを。
「・・・私は」
過去の恐ろしい、トラウマとも言うべき出来事を思い出しても尚、エルザは決意を語った。
「・・・ジェラールと戦うんだ・・・」
「ちょっと待てよエルザ。話に出てきたゼレフって・・・」
「ああ、その通りだ。魔法界史上、最凶最悪と言われた伝説の黒魔導士」

ゼレフ。それは以前にルーシィたちが出会ったとある悪魔を造った魔導士でもある。
例えば、ララバイ。例えば――――
「おそらく、あのデリオラもゼレフ書の悪魔の一体だろう」
「!?」
グレイは戦慄した。なにせ自分の師が命と時間を懸け、苦労の果てにやっと倒した悪魔がゼレフ書の悪魔だろうということを知ったからだ。
「ゼレフとは、あれほどの恐ろしい悪魔を作り出すことが出来る力を持っている」
「ジェラールは、そのような黒魔導士を復活させようとしているのですか」
「動機はわからんがな・・・。過去のジェラールの目的が変わってなければゼレフの復活だろう」
「・・・変わってなければ・・・?」
「ああ、ショウ・・・かつての仲間の話によると、ジェラールがショウたちに伝えた目的が違うんだ」
エルザは思い出す。ショウとのあの会話を。
『へえ・・・姉さん、Rシステムがなんなのか知ってたんだ。意外だね』
『リバイブシステム。一人の生贄の代わりに一人の死者を蘇らせる。人道を外れた禁忌

の外道だろう』
『魔法に元々人道なんてないよ。それに姉さんは少し勘違いしてるね。リバイブシステムは他の方法もあったんだ』
『・・・なに?』
『姉さんには関係ない。元々はその方法を使って蘇らせることができたんだ。けれど姉さんは裏切った。だから犠牲を払うことにしたんだ』
『待て、何を言っている!?』
『かつて、奴等はRシステムをただの反魂の術としか認識してなかった。けれどジェラールは違う。その先の楽園に導いてくれる。ジェラールがアリアを蘇らせて、そして皆であの方を蘇らせる』
『ショウ!!』

『世界は生まれ変わるんだよ。俺達は支配者となる』
狂気が、仄見えていた。
それが、爆発する。
『自由を奪ったヤツラの残党に、俺達を裏切った姉さんの仲間達に、何も知らずのうのうと生きている愚民どもに、評議員の能無しどもに・・・

全てのモノに恐怖を与えてやろう!!そして全てのモノの自由を奪ってやる!!!!俺達が、あの方と共に、世界の支配者となるのだァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!!!!!ガッ!?』

もう、限界だった。

昔は、泣き虫でも、とても心が優しかったのだ。

そのショウがここまで変わる・・・。

何をすれば人はここまで変わる・・・？

ジェラールか、と。

怒りが爆発したのだ。

「そういえば、そのかつての仲間達の事ってどうにも腑に落ちないんだけど・・・。

アイツ等はエルザを裏切り者って言ってたけど、裏切ったのはジェラールじゃないの？」

ルーシィの質問はもっともだ。本来ならば裏切ったのはジェラールで、エルザはむしろ裏切られた立場。同情こそすれ、攻撃などするだろうか？

「私が塔を追放されたときに、ジェラールから何かを吹き込まれたんだろう。しかし、私は8年も彼らを放置した。裏切ったことに変わりは無い」

「でも、それはジェラールに仲間の命を脅されてたから、近づけなかったんじゃない！そ

れなのにアイツ等「もういいんだ、ルーシィ。私がジェラールを倒せば全て終わる」・・・」

ここでふと、グレイは疑問を覚えた。エルザは全て終わると言っているが、本当にそうだろうか？過去のことを話す前にエルザは「この戦い、勝とうが負けようが私は表の世界から姿を消すことになる」と言っていた。その言葉が妙に引っかかるのだ。

と、そこへ。

「・・・今の話・・・どういうことだよ・・・姉さん？」

ピンチなのにゲームとはこれ如何に

「・・・今の話・・・どういうことだよ・・・姉さん?」

通路の奥から震えた声でエルザに問いかける、色黒のホスト染みた男性。――ショウであった。流石に聞かれているとは思っていなかったのか、心なしかエルザも驚いた表情をしていた、がしかし、すぐに申し訳なさで溢れた、まるで「自分の所為なんだ」といわんばかりの表情となる。

「ショウ・・・」

「嘘だろ・・・。ジェラールが言ってたんだ」

「ジェラールが・・・言った?」

ショウの言葉に疑問を覚えたルーシィは、思わずそう呟いた。

「姉さんが俺達を裏切った、て・・・。これが魔法の力を正しく扱えなかった者の末路だ、て」

「お前の知ってるエルザは、そんなことをするヤツなのか?」

ショウは、そうジェラールに告げられた、と言った。だが、本当にエルザはそのようなことをするだろうか?まさにその通りな疑問を、グレイはショウにぶつけてみた。

するとショウは、体の力がガクンと抜けたかのように崩れ落ち、顔を手で覆う。耳をすませてみると、小声で「なんで」「どういうことだ」などといった、困惑の呟きが漏れていた。

「・・・じゃあ、姉さんは悪くないっていうのか、ジェラールが悪いって言うのか!?」

「その通りだ」

後方から、突然の声がした。

カジノの暗闇でグレイ（が造った氷の人形）を殺したシモンだ。

ルーシィは警戒を露にしたが、ジュビアとグレイは違った。なぜならば彼、シモンは暗闇の魔導士であり、暗闇になったときにグレイが急いで造った、間に合わせの人形を敢えて壊していたのだ。

暗闇の魔導士ともなれば、そのような乱雑な造形魔法などすぐに偽者だと分かるだろうが、シモンはそれを見逃している。となれば、こちらを殺すような気など他の連中と比べて格段に低いだろう、ということだ。

「ああ、そうだ。俺は最初から、エルザを信じている。・・・8年間ずっとな」

シモンは、若干照れくさそうに笑った。つまりシモンは、ジェラールに洗脳などといったことはされてなく、真実を捉えていたのだ。

一方、ショウはその事実を知り、エルザに大して途轍もない罪悪感を抱いた。

姉さんは悪くないのに、自分は姉さんを恨んだ。
そう、自分を責めていた。

そこに、一つの報せが届く。壁面に口が生え、そこから男の声が聞こえ始めた。
『やあ、侵入者諸君。ああ、あと裏切り者。ご機嫌いかがかな？』
「この声・・・ジェラールだ」
「・・・ジェラールッ!!」
昔聞いたことがあるジェラールの声より、若干低くなってはいるが聞き間違えようもない。ジェラールの声だ。エルザは思わず、少しだけ声を荒げてしまった。
『そこにいるショウとかから、色々聞かされたらしいが・・・大半は嘘だから間違えるなよ？これから言うことこそ真実だからな』
「・・・嘘・・・なのか？」
『そう、嘘だ。ショウに伝えたRシステムの二つ目の使い方だが、本当は違うんだよ。
『一人の魂と、もう一人の肉体』これらを素材に、生前よりも強化された状態で死者を復活させる。それが二つ目の使い方だ』
「・・・まさか！」
『そう、そのまさかだよ、エルザ。お前の聖天大魔導にも匹敵する魔力を備えた魂と、こ

こにある、あのガキの強靭な肉体を素材に、ゼレフを復活させる。生前よりも、更に強力にしてな』

ジェラールは、エルザの魂とあわせて、彼女の肉体も使い、生前よりも更に凶悪なゼレフとして蘇らせようとしている。その事実が、皆を震え上がらせた。

『そんなわけで、これからゲームをしよう。ルールはとっても簡単だ。俺はエルザたちを生贄にして、ゼレフ復活の儀を行いたい。すなわち楽園への扉が開けば俺の勝ち』

「・・・ふざけやがって!」

『もしそれを阻止できたならそちらの勝ち。ただ、それだけだと面白くない。なので、こちらは三人の戦士を配置する』

「三人の・・・戦士?」

ジェラールが言った戦士に心当たりがないシモンは、疑問をポツリと漏らした。

『そこを突破できなければ俺には辿り着けん。つまりは3対7のバトルロワイアル・・・

ああ、最後に特別ルールを説明しておこう』

『評議員が衛星魔方陣でここを攻撃してくる可能性がある。すべてを消滅させる究極の破壊魔法エーテリオンだ』

「「!!!!」」

エーテリオン。
それは、評議員が持つ攻撃魔法の一つである。遥か上空、宇宙空間にある衛星魔方陣を用い、そこから魔力の塊を投下、爆心地のあらゆる全てを破壊する。一発落としただけで国を滅ぼせるといわれており、島程度であれば周囲の海ごと蒸発、地図上から姿を消す。
そんな危険な魔法が、自分達が居る楽園の塔に落とされるという。時はまさしく、一刻を争う状態となっていた。
『残り時間は不明。しかし、エーテリオンが落ちるとき、それは全員の死。誰も勝者のいないゲームオーバーを指す』
「何考えてんのよジェラールってヤツは・・・自分まで死ぬかもしれない状況下でゲームなんて・・・」
「エーテリオンだと・・・?ありえん、評議員が・・・!?」
ルーシィが困惑するのも無理はない。例えるならば、自分含む何人かがいっ爆発するかわからない爆弾が設置された部屋の中で鬼ごっこをしよう、などと言うのと同じなのだから。
そんな中、ショウの様子が少し変だった。
誰もショウの方を見ていない。故に誰も気づかない。ショウが、エルザに手を向けた

ことに。

ポンッ、と音がした。振り向くとなんと、ショウがエルザをカードに入れているではないか。

「ショウ!?お前何を!!」

「エルザ!!」

シモンとグレイが、ほぼ同時に叫ぶ。だが・・・

「姉さんは誰にも、指一本触れさせない。ジェラールはこの俺が倒す!」

「よせ、一人じゃ無理だ!!ショウ!!」

シモンが引き止めるがショウは意に介さず、そのまま走り去ってしまう。

『さあ、ゲームを始めよう』

死体扱いとはこれ如何に

　時間は進み、エルザはジェラールと対峙していた。
「久しぶりだな、エルザ」
「ジェラール・・・」
「その気になれば、すぐにでもこの塔から脱出できたはずだが？」
「私は、かつての仲間達を解放する。そこのアリアも・・・私たちで弔う」
　ジェラールのすぐ後ろ。まるで生贄を捧げる場のような卓の上。そこにアリアはいた。
「仲間を解放するのはかまわんよ。だがコイツはダメだ。ゼレフの器・・・儀式に必要だからな」
「たとえ、あと十分で塔が破壊されるとしても、か？」
「エーテリオンか？ククッ・・・」
「その余裕・・・やはりハッタリだったか」
「いや・・・エーテリオンは落ちるよ」
　そう、エーテリオンが落ちるというのにジェラールはやけに落ち着いている。エーテ

リオンは全てを破壊する魔法。この塔など跡形もなく消え去るはず。だというのに
ジェラールは落ち着いて、いや落ち着きすぎている。
「それを聞いて安心した! ここで十分! たった十分貴様を足止めすれば、全ての決着がつく!!」
「いや・・・お前はゼレフの生贄となり死んでいく・・・。もう決まっているんだよ。それが運命(デスティニー)だ」
その言葉を合図に二人は戦い始めた。お互い目的があり、それを遂行するために目の前の相手を潰すために。

だからだろう。

卓上に捧げられていた供物の指がピクリと動いたのを見逃したのは。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

楽園の塔、最上階。その柱の一つが壊される。粉塵と共に何かが吹き飛ばされているのが分かる。
エルザだ。どうやら、彼女が柱にぶつかったことによって、柱が壊されたようだ。し

かしこのままではエルザは落下してしまうだろう。しかしそこは妖精女王（ティターニア）か、柱の残骸を足場に飛び上がり、その手に持った刀でジェラールに切りかかる。
「せっかく建てた塔を自分の手で壊しては世話がないな！」
「柱の一本や二本、ただの飾りに過ぎんよ」
「その飾りを造る為に、ショウたちは８年もお前を信じていたんだ!!」
　エルザが怒りと共に振り上げた刀身はジェラールが回避したため、柱の一本を横に切るだけに終わった。
「いちいち言葉の揚げ足を取るなよ。重要なのはＲシステム、そのための８年なんだよ」
　その隙を逃すジェラールではない。その手に魔力を集め、怨霊のような魔力を弾として放つ。その弾に纏わりつかれ、身動きが取れなくなったかに見えたエルザだったが、その手に持った刀で魔法を切り裂き、そしてジェラールに強烈な一撃を見舞う。
　体勢を崩したジェラールの手を掴み、そのまま押し倒して首元に刃を当てる。
「くっ」
「・・・お前の本当の目的は何だ？本当はＲシステムなど完成していないのだろう？」
「!!」
「私もＲシステムについて何も知らないというわけではない。確かに、構想や原理は当時の設計通りで間違いはないだろう。だがそれ以前に一番大切なものが足りていない」

「言ったはずだ・・・生贄はお前「それ以前の問題だ」」
「足りていないものとは魔力。この大掛かりな魔法を完成させるには、２７億イデアもの魔力が必要になる。これは大陸中の魔導士をかき集めても、やっと足りるかどうかというほどの魔力。人間個人では勿論、この塔にもそれほどの魔力を蓄積できるはずなどないのだ」
「・・・」
「そのうえ、お前は評議院の攻撃を知っていながら逃げようともしない。おまえは何を考えているんだ」
「・・・エーテリオンまで、残り三分だ・・・」
「ジェラール!!お前の理想はとっくに終わっているんだ!!それとも、このまま死ぬのがお前の望みか!!ならばこのまま共に逝くのみだ!私はこの手を、最後の瞬間まで放さんぞ!!」
　ジェラールの腕を握る力を強め、エルザはそう言う。すると、ジェラールはこう返した
「ああ・・・お前と逝くのも・・・悪くない・・・」
　ジェラールはそう言うと、神に許しを請うかのように呟き始めた。
「俺の体は、ゼレフの亡霊にとり憑かれた・・・。何も言うことを聞かない・・・。ゼレ

フの肉体を蘇らすための人形なんだ。俺は・・・俺を救えなかった・・・。仲間も、誰も、俺を救える者はいなかった。楽園など・・・自由などどこにもなかったんだよ。全ては始まる前に終わっていたんだ・・・。Rシステムなど、完成するはずがないとわかっていた。しかし、ゼレフの亡霊は俺をやめさせなかった。もう・・・止められないんだよ。俺は壊れた機関車なんだ・・・」

上空に衛星魔方陣（サテライトスクエア）が形成され始める。それでも、ジェラールもエルザも、どちらも動くことはない。

「エルザ・・・お前の勝ちだ。俺を殺してくれ・・・そのために来たんだろう?」

そのときのジェラールの顔が、かつてのジェラールを思い出させて。そのときに殺す気が霧散してしまった。

「私が手を下すまでもない・・・。この地鳴り、すでに衛星魔方陣（サテライトスクエア）が塔の上空に展開されている。終わりだ。お前も、私も、な」

「不器用な・・・やつだな・・・」

ジェラールの手を離し、その上から下りる。

「ジェラール。お前も、ゼレフの被害者だったのだな」

「これは自分の弱さに負けた俺の罪さ。理想と現実のあまりの差に、俺の心がついていけなかった」

「自分の中の弱さや、足りないものを埋めてくれるのが、仲間という存在なのではないのか？」
「エルザ・・・？」
「私も、おまえを救えなかった罪を償おう」
　そう言うと、どちらからでもなく互いに抱擁をした。
「いや・・・俺は、救われたよ・・・エルザ」

　そして、光が墜ちた

〜〜〜

エーテリオンは落とされた。確かに、死んだはずだ。だが、なぜ生きているのだ？
エルザは疑問に思った。自らの体も、意識も、この世界から離れることもなく現在存在している。
「くく・・・！」
「・・・ジェラール？」
　遠くから見ると、その変化が良く分かるだろう。レンガの面影はなく、土煙が晴れる

と見えるその透き通る色。

「アハハハ!!!」

「・・・ジェラール、貴様・・・！」

「くく・・・驚いたかエルザ。これが楽園の塔の真の姿、巨大な魔水晶なのだ。そして、評議院のエーテリオンにより、２７億イデアもの魔力の吸収に成功した!!ここに、Ｒシステムが完成したのだァ!!」

「だ・・・騙したのか・・・」

「ジェラールの手の上で転がされるお前は可愛かったぞ、エルザ」

　ジェラール以外の声が聞こえた。しかしその声は、やけにジェラールに似ていた。それもそのはずだ。

「・・・ジークレイン!?なぜ貴様がここに!?」

「ジェラールも本来の力を出せなかったんだよ。本気で危なかったから騙すしかなかった。初めて会ったときのことを思い出すよ、マカロフと共に始末書を提出しに来たときか。ジェラールと間違えて俺に襲い掛かってきた。まあ・・・同じ顔だし無理もないか。

双子と聞いてやっと納得してくれたが、それでもお前は敵意をむき出しにしていたな」
「当たり前だ！貴様は兄のくせに、ジェラールのやろうとしてることを黙認していた！いや、それどころか私を監視していた!!」
「そう・・・そこが俺のミスだった。あの時は『ジェラールを必ず見つけ出して殺す』とか言っておくべきだった。しかし、せっかく評議院に入れたのにお前に出会ってしまったのが一番の計算ミスだな」
「とっさの言い訳ほど苦しいものはないよな」
「やはり・・・お前達は結託していたのだな」
ジークレイン、ジェラールが言う言葉にそう呟いたエルザだったが、予想外の返しが返ってきた。
「結託？それは少し違うぞ、エルザ。」
「俺達は一人の人間だ。最初からな」
ジークレインの体がまるでホログラフのように薄くなると重なり合った。
「そんな・・・まさか・・・思念体!?」
「そう、ジークは俺自身だよ」

「バカな!!な・・・ならば、エーテリオンを落としたのも自分自身!!そのために評議院に潜り込んだだと!?」
「仮初の自由は楽しかったか、エルザ?全てはゼレフを復活させるためのシナリオだった」
「・・・貴様は・・・貴様はどれだけのものを欺いて生きているんだ!!?」

　眠る竜が目覚めるまで、もう少し。

～～

　魔法評議院ＥＲＡ。エーテリオンを発射する基地であるこの場は現在、騒然としていた。
「楽園の塔に２７億イデアの魔力蓄積!」
「そんな魔力、一箇所にとどめておいたら爆発するぞ!?」
「てかどうなってんだこれは!?」
　そんな叫びがあちらこちらで飛び交う中、評議員のヤジマは一人激しい後悔や自責の念に追われていた。
「やられた!くそぉ!」

そんな中、更に事態を混乱させる出来事が起きる。建物が急速に老朽化しているのだ。失われた魔法（ロストマジック）の一つ『時のアーク』だ。

急速に老朽化が進み、評議院の建物が崩れ落ちる中でヤジマは一人の女性を見た。

それはジークレインの秘書であったウルティア。崩れ落ちる評議員の中、こちらを見てこう呟いた。

「全てはジーク様、いえ、ジェラール様のため・・・。あの方の理想は今ここに、叶えられるのです」

～～～

晶に、お前の体とアリアを融合させる。そしてお前の体は魂に、アリアの体は器として、ゼレフを復活させる贄となるのだ」
「うあああ！」
　ジェラールがエルザを突き飛ばしたことで、エルザの体は魔水晶に取り込まれ、水晶に変質したときに卓が消えたアリアの体は、そのまま床の水晶と融合していた。
「偉大なるゼレフよ!!ここに、この女達を捧げる!!」
「ジェラール・・・ジェラールゥゥ!!」

　水晶に飲まれ始めていたその手を誰かが掴み、引っ張り出した。
「おっと」
　桜色の髪に竜の鱗のようなマフラー。ナツだ。
「エルザは妖精の尻尾の魔導士だ。渡さねーぞ」
「ナツ・・・」
「なーにしてんだよエルザ。はやくしねーと今月の家賃払えないぞ」
「す、すまない。体が思うように動かなくて・・・」
　「ルーシィが」と笑いながら付け足すナツはいつものように笑っており、自分がそのように返すとほほうと呟き、くすぐってきた。

「普段ヒデー目にあってるからな！これでもくらえ！」
「や・・・やめ」
「かっかっかー!!」
くすぐりが終わり、少し疲れながらもエルザはナツに伝えた。早く逃げろ、と。
「やだね。オマエが無理なら俺がやってやるさ」
「よせ・・・相手が悪い。おまえはあいつを知らなさ過ぎる」
「知らなきゃ勝てねえもんなのか？」
「頼む・・・言う事を・・・聞いてくれ」
涙ながらにナツにそう頼むと、エルザの体を起き上がらせ、寄りかからせた。
「エルザ。オレもオマエをぜんぜん知らねえ」

「けど勝てる!!」
ナツはそう言うと、エルザの腹を殴って気絶させた。
「・・・噂以上の傍若無人ぶりだな、ナツ・ドラグニル。身動きできない仲間を痛めつけて満足か」
「・・・エルザが、泣いてた」

「弱音を吐いて、声を震わせていた」
「そんなエルザは見たくねえ。エルザは強くて凶暴でいーじゃねえか」
「目が覚めたとき、いつものエルザでいてほしいから、オレが戦うんだ！」
かくして、怒れる火竜と流星の魔導士の戦いの火蓋は切って落とされた。
しかし、またも誰も気付かない。
水晶の中で眠る竜が一匹、目が覚めたことに。
～～～

・・・ところでさ。俺はいつになったらこの空間から開放されるのん？

いや、悪堕ちしてたと思われるジェラールを助けた後から記憶がないのよ。あの後すぐに気を失ったしさ。

で、今どこまで進んでるのさ。俺の身体早く目覚めてくれないかな・・・。

あー、暇だなぁ。・・・そうだ。ここには俺以外には誰もいないんだし、前世ではあまりやれなかったあの動きを再現してみよう。

突然すまないが、エヴァンゲリオン弐号機はご存知だろうか？新劇場版・破で出てきたやつの方だ。個人的に、破は名作だと思うんだ。特に初号機が暴走して第１０使徒を倒すシーンは最高だと思う。だが俺は、その前のシーンが好きだ。そう、弐号機のビーストモード。あの猫のような俊敏さの中にある、暴走のようなあのカッコよさ。・・・もう、堪んないです。

俺は当時、あの動きにロマンを感じて再現しようとしていたのだ。結果？・・・察してくれ。あの人外な動き、再現できるわけなかろう。

だがここでは別だ。ここは想像した通りに動ける、まさに夢のような空間。再現しようではないか。

まず、あの身悶える所から。自らの体を掻き抱きながら蹲り、四つんばいになる。そして、肩からあの筒が出てくるあの痛み（？）を想像しながら体を動かす。そして、イ

メージが終わると同時に顔を上げる。瞬時に跳躍し、仮想敵に飛びかかる。おお、予想以上にヌルヌル動いてくれる。

だが敵よ。横に動くとはなかなか分かってる動きをしてくれる。

俺は体を獣のように横にずらし、右手で敵を突く。すんでのところで避けられる。むう・・・ならば右の踵で吹き飛ばしてやる。よっしゃ当たった。さて、次は飛び掛ってＡＴフィールドを破ったあの殴りを再現しようではないか。敵に飛び掛るが、その敵が攻撃を放つ。これを空中ジャンプで避け、もう一度飛び掛る。のしかかろうとすると、敵はＡＴフィールド（のようなもの）を出してきた。なのでそれを次々と殴って破る。

おお・・・再現できている！俺は喜びのあまり、つい「よっしゃあ！」と叫んでしまった。

おっといかんいかん。弐号機はしゃべらないぞ俺。

・・・にしても、いつになったら目覚めるのやら。

～～～

だが、それは途中で何かに吸収されるかのように消えた。

疑問に思わなかっただろうか?本来、Ｒシステムは一人の生贄の体を、生き返らせたい者の体に再構築して復活させる魔法。魔水晶の中にはアリアがいる。なぜこれで発動しないのか。

理由は、アリアの魔法にある。

彼女の魔法は魔竜の滅竜魔法。あらゆる魔を吸収し、自らの力と化す古の魔法(エンシェントスペル)だ。故に、２７億イデアの魔力を蓄積した魔水晶から魔力を吸収した結果、Ｒシステムは発動しなかった。

彼女の魔力量にも理由があるだろう。その総魔力量、アクノロギアの元にいたときは子供であったのに関わらず、既に1億イデアを超えていた。今となっては計るのも馬鹿馬鹿しい。

つまり、ジェラールの魔法を吸収したのは。

「・・・アリア!?」

「・・・どういう・・・ことだ!?お前はあの時、確かに俺の魔法で眠らせたはず・・・!」

理由は単純だろう。アクノロギアは、確かに魔力制御は教えていた。だが、体内の魔力が尽きたときのことなど教えていない。というか、アクノロギアのことだから考えたことすらないだろう。

アリアは自分の魔力がどれほどの量かを確認しないで、消費魔力が格段に大きい魔法を連発していたため、気付かぬうちに大きい魔力切れを起こしたうえに、魔力が回復するまでの休息を取らせようと体が眠っただけだったのだ。

しかしアリアの様子が変だ。まるで、今吸収した魔法が体に悪影響を及ぼしたかのように体を震わせている。挙句、自分の体を掻き抱いて蹲った。

アリアが魔法を吸収したとは思っていないエルザはアリアの名を呼んで、今にも駆け寄りたい気持ちに駆られた。そのときだった。アリアの体に異変が起こったのは。

四つんばいになり、まるで体の中の異物が発する痛みに耐えるように体を震わせ始めた。そして、その肩口から、黒い翼が生えた。変化は更にある。アリアの体が、まるで竜のように変化していくのだ。手が、足が、腰から尾が伸び、そして、アリアが顔を上げるとそこには、顔の半分が鱗に覆われた、ドス黒い魔力を放つ竜（アリア）の顔があった。

飛び跳ねたアリアはジェラールを切り裂こうとその爪を振るう。

「なんだ、貴様は!?」

横に飛び跳ねることで飛び掛りを避けたジェラールは、思わずアリアにそう叫んだ。瞬間、気付けばすぐ横にアリアがいた。

「!?」

なんとか体を捻ることで突き出されるその手を避けるが、代わりと繰り出された右足は避けることが出来なかった。

圧倒的だ。先ほどまで自分達が苦戦していたジェラールを、まるで赤子を捻るようにあしらうとは。アリアは、一体どういう力を持つのだ。そもそも、その竜のような風貌は?

そんな中、アリアから声が聞こえた。

『我の愛娘を目覚めさせたことは感謝するぞ、羽虫』

「その声・・・ゼレフ!?」

今、ジェラールは何と言ったか?アリアから聞こえるこの声をゼレフと?どういうことだ?

『我はゼレフではない。そも、羽虫に名を明かすほど酔狂ではないのでな』

「どういうことだ・・・俺は、お前が伝えたことが真実だと・・・!」

『我の手の上で転がり、一所懸命に羽ばたくその姿は滑稽であったぞ?』

どうやら、この声は名を明かす気はないらしい。しかし、ジェラールに伝えたこと・・・

？もしやRシステムのことか？

『まったく、手のかかる娘だな・・・。さて羽虫。お前が我の娘を起こそうとこの塔を作っていたのならば我も何も手を出さなかったのだが・・・我の娘を危険に晒し、あまつさえ生贄だと？・・・その罪は重いぞ？』

底冷えする声だ。生物の本能に響く、とでも言えばいいだろうか。その言葉の対象であるジェラールは怯えに怯え始めた。だが、声は許す気はないらしい。

「く、来るなぁ!!」

ジェラールが魔法で何十にも防御を重ねた。結界の類だろうか？見たところ、十数枚はありそうだ。それにアリア（のようなナニカ）は飛び掛る。迎撃にもならないだろうが、衝撃が大きいのだろう魔法を放ったが、アリアは空中で避け、そのうえ結界に飛び掛る。拳が突き出されるたびに一枚、また一枚と数を減らしていく結界。

最後の一枚が割れると同時に、アリアは少し距離をとった。そして、何かを溜め込む動作をすると、トドメを放った。

その咆哮は魔水晶の柱を破壊し、そしてジェラールを遥か彼方へと吹き飛ばしたのだった。彼が今更、その羽虫の行方を気にするような心の持ち主ではないだろう。

～～～

ジェラールを吹き飛した後、アリアはバタリと倒れ付す。まるで糸が切れたかのように。
「アリア!」
「アリア!」
エルザと何時の間にか辿り着いていたシモンは、倒れ付したアリアを見るとすぐさま駆け寄る。よかった、と二人同時に安堵の溜息を漏らす。息はしている。ちゃんと生きているようだ。
だが安堵したのも束の間、塔が揺れる。どうやら崩壊を始めたようだ。
エルザは死力を振り絞って駆け寄ったもので、どうにも動くことが出来ない。
「エルザ。俺が二人を担ごう」
「ああ・・・頼む」
「なんだぁ、エルザ?まぁた動けないのか?」
「冗談は後にしてくれ。今は早く脱出を・・・」
そのとき、アリアがゆっくりと目を覚ます。
「アリア、目が覚めたのか!?」
「よかった・・・早く脱出するぞ!・・・アリア?」
「・・・」

アリアはその問いに答えない。どうしたのだろうか。その視線はどうやら私たちの後ろを見ているようだ。どうしたことか。背後には魔水晶しかない。いや、そもそもこの塔自体が魔水晶だが。

フラフラとした足取りで、魔水晶に近づくと手を当てる。すると、その体が魔水晶に取り込まれた。

「アリア!?まさか・・・暴走する魔力を制御するために!?」

「やめろ!そんなことをしたらお前が死んでしまう!」

エルザの叫びもむなしく、アリアは微笑みながら手を振る。

――逃げろ、ということだろうか。

「・・・行くぞ、エルザ!せめて、俺たちだけでも・・・!」

「・・・ああ!」

涙ぐみながら、アリアが犠牲になってでも作ってくれた道だ。生き残らなければ・・・!

～～～

あ、久しぶり。アリアです。結局俺って何年寝てたんねーん。知らんねーん。
ていうか、さらっと私殺していったけどさ、まだ死んでないからね？いま魔力吸収中ですんで、それ終わったころにはウォータージェットみたく飛べると思う。・・・待った、死ぬ未来しか見えない。
え、ちょっと待って、やっぱ出ます。ほら、俺の体動いて。・・・ウゴケェェェ!!イヤァァァァァ!!シィィィヌゥゥゥゥゥゥゥゥ!!

ソラハアオカッタデス。

～～～

ルーシィに心配されてしまった。どうやら相当悲しそうな顔をしていたようだ。だが、今だけは許してほしい・・・。

と、グレイが上を見上げながら呟いた。

「・・・アレ、何だ？」

「うん？」

グレイが指差す先。そこには何か大きい光があった。

「まさか・・・」

上から舞い降りてきたのは、背中から魔力を制御しつつこちらに向かっているアリアだった。

おまけ話：ギルドに所属したのである

ガヤガヤとした喧騒。酒臭い中にある、何処か安心する雰囲気。

ここはギルド『妖精の尻尾』の中。その中心に俺はいた。自分の身に突き刺さる、好奇の目線。なんともむず痒い、というより恥ずかしい気分だ。もっとも俺の体では、恥ずかしさで顔が熱くなるとかもないので便利だとは思う。その点についてはこの顔ナイスだ。

「静かにせんかバカたれ！」

ギルドマスター、マカロフの一叫びでギルド内は一気に静まり返り、ギルドメンバーはマカロフを注視する。・・・ついでに俺も見られている気がするが気のせい気のせい。

「今日からワシらの家族になるやつじゃ、ホレ挨拶せんか」

おっと、自己紹介をしろと。いいでしょう、たわくしの超々短い挨拶を聞くがいい！・・・いや、ホントぼっちは辛いからお願い聞いて。

俺はマカロフの言葉に頷き、こう答えた。

「・・・アリア・ロギア」

「だそうじゃ。同じ家族じゃ、仲良くしなさい、以上！」

「「おっしゃー！」」

おお、流石『妖精の尻尾』、挨拶が元気一杯ですな。

さて、今日は無難に適当な席に座ってのんびり過ごすかな「アリア」うぃ？誰かに呼ばれたな。

顔を向けるとそこにはエルザが立っており、その後ろからルーシィが顔を出した。

「やっほ」と言いながら顔を出したルーシィは、俺が反応を返す前に隣に座り、そして俺に話しかけた。

「それじゃ、この前の帰り道に自己紹介はしたと思うけど改めてしとくね。私はルーシィ。星霊魔法の使い手よ！」

「・・・（パチパチ）」

「えへへ・・・」

個人的には星霊魔法はロマンある魔法なので好きです。ていうかバルゴ可愛い。アクエリアス可愛い。キャンサー面白い。サジタｒ（ｒｙ

そんな星霊魔法の使い手であるルーシィ。まあ仲間であるということも踏まえて拍手もしますわ。・・・で、エルザは座らんの？ずっと俺のほうを見てなんか涙ぐんでるけど。そんな意味も含めてじっとエルザを見つめていると、俺が自分を見ていることに気付いたみたいだ。照れくさそうに笑いつつ、俺の対面に座った。

「・・・まあ、その・・・なんだ。久しぶりだな」
「・・・(コクリ)」
　そうよなぁ、俺が寝てた詳しい期間は知らんが、かなり長い間寝てたみたいだ。証拠にエルザが小学生レベルから高校生・・・いや、大学生か?レベルまで成長してる。うん?どこがって?そりゃあお前、m背丈ですね間違いない。決して胸部装甲ではない。いや、鎧的な意味では成長してるがそないな無機物で計れるか俺。できませんね。
　それにしてもエルザはここまで成長してるのに俺の体は以前の状態で止まっていますねぇ・・・なんでじゃろ。俺に・・・誰だっけ、彼の名前。ド忘れしたんだけど・・・。じぇ・・・じぇ・・・ジェシー?いやなんで女性名。まあ彼のかけた呪いのせいかね。そうだと信じたい。俺の今生の体が幼女体(ロリボディ)幼女体から成長しないロリババア体(ボディ)だったら泣くぞ。割と本気で。
　それはそうと、久しぶりに話したエルザは若干の違和感がある。なんというか間に壁があるというか何というか・・・。これはあれか、俺を一時的とは言え救えなかったことに対する罪悪感故に距離を置いてるとかそんな感じかね。
「エルザ」
「・・・ん?どうした、アリ・・・!?」
　エルザに呼びかけてこちらを振り向かせた。俺はエルザの頭に手をやり、そしてゆっ

くりと撫でる。突然のことに驚くエルザは知らぬ。今は俺のターンだ。とにかく撫でられるがいい！

　およそ３０秒、黙々と撫でた後にエルザを開放してやった。エルザは目を困惑してますといった風に瞬きさせ、ルーシィは自分の星霊の鍵と手入れ用と思われる布を手に持ってこちらを凝視していた。とりあえずその表情やめろ。咆哮食らわすぞ・・・やっぱ平手にしておこう。お、目を背けた。

「・・・エルザ。・・・気に病まない」

「・・・え？」

「・・・気にしてない」

　相変わらず、あまり言葉が足らない体だが、今回ばかりは伝えられただろう。流石に。

「気に病むんじゃねえ！俺は救われなかったことに関しては気にしてねえ！ていうか効いてねえから気にもしねえ！」てことを伝えれたはず！ついでに笑顔も忘れずに。

「・・・！」

　俺の言葉に涙ぐんだ様子で俯くエルザ。と、そこへ誰かがやってきた。

　桜色の髪、鱗みたいなマフラー。――――ナツですね間違いない。

「おーいエルザー」

「ん・・・ああ、ナツか。いや、なに。アリアが優しくてな」

「ふーん・・・あ、そだ！」
ナツはそこで思いついたように俺に振り向き、斯様なことを申しやがった。
「アリア、決闘しようぜ！」

ほーん、決闘。
・・・決闘・・・決闘!?

～～～

「オイラ聞いたもん。アリアが強いってエルザが言ってたの聞いたよ」
「なにい!?じゃあ俺が勝ったらエルザより強いってことだな！燃えてきたぞ！」
　ちょ、エルザ。なに勝手に俺が強いとか言ってるのさ。俺弱いよ？きっとミラジェーンよりも・・・いやまて、ミラジェーン強くなかったか？思い出せそうで思いだせな・・・あ、そうだ。強いに決まってるわ。ええ、てことは誰だ・・・少なくともナツより弱い、以上、決定！
「それじゃあ、勝負開始！」
「先手必勝だぁ!!」
　え、ちょ、待。
　唐突に鳴らされた決闘の始まりを告げる砲声。唐突過ぎて反応できんとです。とりあえず手を前に突き出せばまだ被害が少ないに違いな――ガスッ！・・・ガスッ？
　手の先を見ると、綺麗に顔面に掌底が決まった形でナツが固まっていた。
　・・・うーんと・・・すまぬす。
～～～

それにしても・・・これから棲む家どうすっかなぁ。

（数瞬の思考の後）・・・うん、

屋根の上で良いや。